

世界における生涯スポーツの最新動向
—第14回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議に出席して—

野川 春夫*

Contemporary Sport for All Movement in the World
— A Report on the 14th International Trim & Fitness Sport for All Conference —

Haruo NOGAWA*

【はじめに】

第14回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議が、イスラエル国ナタニヤ市のカーメルホテルにおいて6月25日～29日にわたり開催され、筆者は日本を代表して基調講演を行った。前回の千葉大会（1993年11月）と比較して、参加国数及び参加者数ともに大幅に下回った。これはアラブ諸国や他のイスラム教国などが外交上の制約から参加できなかったことに加え、政情による治安への不安感を払拭できないための不参加者も相当数あったと推察される。参加国42、総参加者数は100名ほどと実行委員会から発表されたが、参加者登録表でみると参加国は34、総参加者は86名に止まった。

世界における生涯スポーツに関するいろいろな情報交換の場としてこの国際会議は高い評価を受けている。従ってこの会議に出席することにより世界における生涯スポーツの最新動向を察知する機会を得たことになる。

第2回ワールドカップラグビーの決勝戦が行われた24日には、参加者の約半数が入国し、簡単な受け付け、ホテルへのチェックインの後にTAFISA（国際トリム・フィットネス生涯スポーツ協議会：Trim & Fitness International Sport for All Association）の理事会が開かれ、その後に非公式な歓迎パーティーが行われた。日本からの出席者は、TAFISAの理事で健康・体力づくり事業財団の青木高部長を筆頭に笹川スポーツ財団の坪内寿雄会長ほか3名及び筆者の6名であった。翌25日

の開会式にはワールドカップ優勝国の南アフリカからスポーツ省の審議官を含む5名が到着し、意気盛んなところをアピールしていた。

【生涯スポーツの最新動向】

会議の主要テーマ

第14回会議は、《生涯スポーツにおけるプログラムの役割》をメインテーマとし、サブテーマに『生涯スポーツプログラムの組織化』『生涯スポーツのマーケティングとプロモーション』『生涯スポーツのボランティア活動』をかけた。また、『健康のための運動』をサブテーマと同列に扱っていた。これは千葉で開催された前回の会議からの流れとして、「健康のための運動プログラム」を他の国際機関（WHO / FIMS / UNESCO など）と提携して進めていく指針をさらに鮮明に意志表示するためでもあった。

『健康のための運動：世界的規模のプログラムへ』と題してTAFISAのバルム会長に続いて国際スポーツ医学協会（FIMS）のデローズ会長とユネスコ（UNESCO）のバンブークが講演した。生涯スポーツの今後の展開としては、TAFISAが組織として「健康のための運動プログラム」を他の国際機関（WHO / FIMS / UNESCO）と提携して進めていく意向をバルム会長が明言した。

生涯スポーツプログラムの組織化

第2日目の本会議では、筆者が最初の基調講演者となり「日本における生涯スポーツの最新動向とニュースポーツ団体の出現」と題して、日本の

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

生涯スポーツプログラムの組織化の現状を文部省、健康・体力づくり事業財団、笹川スポーツ財団などのプログラムを中心として紹介し、今後の課題を提言した。続いてルイーズ（コロンビア）が基調講演し、生涯スポーツプログラムを組織化させる場の設定について自国の実例を用いて紹介した。

この二人の基調講演をうけて7カ国の実践例が発表された。オーストラリアを除く6カ国が全国規模のプログラムの組織化を紹介し、とても的がよく絞られたセッションとなった。この中で特に注目を集めた発表は、ノルウェーの「オリンピックに向けての国民の体力づくりキャンペーン」と韓国の「33カ所の高速道路レストエリアにおけるフィットネス運動の展開」であった。ホルスタッド女史（ノルウェー）は、リレハンメルオリンピック開催決定からノルウェースポーツ協会がオリンピックキャンペーンに便乗して国民への体力づくりの啓蒙と実践の呼びかけを4年間系統的に行った結果、国民のスポーツ・身体活動への定期的な参加率が72%から78%に向上したと報告した。世界的なイベントを利用して生涯スポーツプログラムを組織化できる方策を提示した。キム・ミンソーは、韓国の自動車の急増による交通事故死の増大を慢性的な交通渋滞と関連させ、ドライバーにゆとりと眠け覚まし、及び体力づくりの一石三鳥を狙った運動プログラムを高速道路のレストエリアで推進している例をスライドなどを使って報告した。日本で以前から実施されているプログラムと極めて類似していた。また、イスラエルのイラン・ゴネンは、浜辺（ビーチ）を利用した各種の体力づくりやスポーツプログラムを紹介した。いずれも各国の国土の特性や社会経済の進展度に合わせた生涯スポーツプログラムの組織化に腐心していることが窺われた。

グループ討議

バウマン（ドイツスポーツ連盟）の進行のもとで、マーケティングのSWOT分析法を用いて、生涯スポーツプログラムの組織化における強み、弱点、機会、脅威について活発な意見の交換が行われた。国際レベル、国レベル、地域レベルの3つに分けて生涯スポーツプログラムの組織化の将

来が話し合われたが、ドイツなどの生涯スポーツ先進国が国際規模、世界規模の組織化を模索するのに対して、生涯スポーツ発展国の南アフリカや香港などからは地域レベルの組織化に重点を置くべきであることが強調され、各国の抱える問題の違いが判明した。全体的には、生涯スポーツの原点である地域レベルのプログラムの充実と多様化の促進を進めるべきであるという点で意見が一致した。また、午前のセッションの座長を務めたスタウブル（スイス・スポーツ連盟）からTAFISAの組織の肥大化の傾向と各国の実情からかけ離れた戦略への自重を促す発言がなされ、拍手をもって彼の意見が尊重された。

生涯スポーツのマーケティングとプロモーション

カナダのラス・キスピー（ParticipACTION）による「生涯スポーツの優れたマーケティングとプロモーション」とインパクト社のクラウス・ラインハルト（ドイツ）の「TAFISA 事業のプロモーション」と題する二つの基調講演の後、7カ国の実践例が発表された。

キスピーは、1972年から現在までにパーティシパクション（ParticipACTION）が行ってきた各種プログラムのマーケティングとスポンサー獲得のイロハを克明に紹介し、今後の生涯スポーツ振興には伝統的なマーケティング手法をスポーツの特性に合わせて変容し、取り入れていく必要性を強調した。特に、財源の確保とキャンペーンやメッセージの効果的な伝達方法を実現するためにもマーケティング法の確立が必要不可欠であると訴えた。これに対してラインハルトは、TAFISAの「健康のための運動プログラム」を将来のTAFISAの統一ブランド商品と位置づけ、世界各国で共通のキャンペーン方式を使って普及させていく構想を説明したのに止まり、具体的なマーケティング戦略には触れなかった。キャンペーンには世界的な有名人であるサッカーの王様ペレの起用を考えており、「健康のための運動プログラム」の国際的な認知、スポンサーの獲得、宣伝プログラムの開発などを進めていく意向を語った。

実践例としては、バウマンの「ドイツにおける

ウォーキングプログラムやイベント普及のマーケティング戦略」, デイクソン (オーストラリア) の「Life. Be in it.: さあ, 試してみよう」, 及びスタウブル (スイス・スポーツ連盟) の「プロスポーツクラブへ向けてのキャンペーン」などの7カ国のプログラム普及戦略が紹介され, 参加者の関心を集めた。また, プログラムには載っていなかったが南アフリカのゴスリン教授が自国の生涯スポーツプログラムの普及の実情をビデオで紹介した。

パウマンの発表はマーケティングのポートフォリオ・マネジメントの枠組みを活用して, ドイツにおけるウォーキングのプログラムとイベントの現状を整理し, 今後の対策やキャンペーンのあり方などを分析し, 生涯スポーツのマーケティングにおけるポートフォリオ・マネジメントの分析手法の有効性を示唆していた。

グループ討議

今回の会議を通じて直接的・間接的に話題となったものに青少年のアルコールと麻薬の蔓延及び身体活動の敬遠の深刻化があげられる。スイスのキャンペーン活動は, 麻薬を否定してスポーツ参加を積極的に促す内容のTVのスポット番組になっており, 現実問題を直視したキャンペーン内容とそのプロモーション手法に注目が集まった。イギリスやカナダ, ドイツなどの西欧・北米各国においても同じ悩みを抱え, 類似したキャンペーンを進めている。悲しいことながら, 青少年の『麻薬汚染』『アルコールの常用』『身体活動の敬遠・関心の低下』の3点は脱工業化社会の象徴的な問題といえよう。また, 北アイルランドでは, 生涯スポーツ振興の予算は極めて限られており, 青少年問題と連結させないと経済的な支援を得られないとクラークは語っていた。社会問題や国際政治問題の解決する道具としての役割・機能を生涯スポーツに期待する発言が非常に目立った大会であった。

長い会議の後は, テルアヴィヴ市のウォーターフロント・ジャファにおいて夕食とエンターテインメントが開かれた。日本的に言うとカフェバーで, カラオケからダンスフロアまであるレスト

ランで, 各国の参加者達は飲食物と歌やダンスでお互いの交流を深めた。今やカラオケは世界言葉になりつつあると感じた。

生涯スポーツとボランティア

パルム会長の「ドイツにおける新キャンペーン」と実行委員長のブラッツ (イスラエル) の「生涯スポーツにおけるボランティアの重要性」と題する基調講演が行われ, 続いて7カ国の実践例が発表された。生涯スポーツを担うボランティアの確保とその教育システム, 社会的・物質的な報酬, およびボランティア活動を長期的に継続できるようなサポートシステムの確立など, 重要な課題が山積みの分野である。しかし二人の基調講演の内容には特に新規性はなく, これまで折に触れて耳にした内容の繰り返しであった。特に, パルム会長の講演内容はドイツのスポーツクラブの活性化キャンペーンの色彩が強く, ボランティアセッションよりもプロモーションセッションの方がインパクトが強いと感じられた。

このセッションでは, 一般発表のほうボランティアに関して各国の事情に合わせた有意義な方策が紹介された。内容的には, ボランティア獲得のキャンペーン (フランス), ボランティアの活動継続のインセンティブ (タイ), ボランティア養成 (韓国・フィンランド) ボランティアに求められる資質 (日本) と多様であった。健康・体力づくり事業財団の青木事業部長は, 阪神大震災のボランティア活動を引き合いに出しながら, 生涯スポーツのボランティアに求められる資質をユーモアを交えて説明した。またこのセッションでは日本, 香港, タイのアジア3カ国が発表し, 国別のバランスがよくとれた運営であった。

全体の感想と今後の方向性

ホスト国の精一杯の歓迎ぶりには感心させられたが, 前回の千葉大会に比較して参加国と参加者の大幅な減少, 特に地元イスラエル人の参加者が極めて少なく盛り上がり欠けた会議であった。参加者数が少ないことだけでなく, 各国の生涯スポーツの進展度もやや停滞気味という印象を受け

た。これは、この2年間 TAFISA が他の国際組織 (WHO / FIMS / UNESCO) と積極的に連携をし、国際組織としての基盤を固めようとする意図が先行し、実質的な生涯スポーツの振興をおろそかにした結果ともいえよう。パルム会長が提唱する「健康のための運動プログラム」に対する各国の反応も異なり、生涯スポーツ先進国と発展途上国では TAFISA への期待が異なることを浮き彫りにしていた。

国際的なプログラムを世界各国で統一的に繰り広げていきたいとする生涯スポーツ先進国と、生涯スポーツは元来地域レベルのものであり、それぞれの国の内情を考慮してより地域に根ざしたプログラムの開発と普及方法またそれを支援する生涯スポーツ行政についてのデータベースや情報交換の必要性を訴える生涯スポーツ後進国の差異が明確になった。

また、深刻化する青少年問題や他の社会問題を生涯スポーツで対処しようとする動向が見られる。このように生涯スポーツを目的的に利用しようとする傾向が強まりつつある。そして各国参加者の関心は、多様化する生涯スポーツのプログラムとそのマーケティング手法に集中しており、4M(メッセージ・メディア・マーケット・マネー)の有効なミックス法の情報交換をさらに活発になっていくであろう。

第14回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ 会議プログラム

期 間 1995年6月25日～29日
場 所 イスラエル, ナタニア市
主催団体 国際トリム・フィットネス生涯スポーツ協議会, イスラエル生涯スポーツ協会
協 力 イスラエル文部省, イスラエルオリンピック委員会, マカビー健康基金, ほか
参 加 国 (34カ国 86人) アルゼンチン・オーストリア・オーストラリア・ベルギー・ブラジル・ブルガリア・カナ

ダ・コロンビア・キプロス・デンマーク・英国・フィンランド・フランス・ドイツ・香港・ハンガリー・イスラエル・日本・韓国・マラワイ・モーリシア・ロシア・ルーマニア・ナイジェリア・ノルウェー・スロバキア・南アフリカ・スウェーデン・スイス・タイ・米国・ベトナム・ユーゴスラビア・ジンバブエ

- 6月24日 参加者受け付け・TAFISA 理事会
前夜祭
- 6月25日 ウォーキングイベント
ウォーキングと世界ウォーキングデー
の国際ワークショップ
研究セッションⅠ「健康のための運動
を世界規模のプログラムへ」
発題者ユルゲン・パルム (TAFISA)
エドアルド・デ・ローザ (FIMS)
ロジャー・バンバック (UNESCO)
オスカー・アズエロ・ルイーズ (TAFISA)
- 6月26日 研究セッションⅡ「生涯スポーツプロ
グラムの組織化」
・基調講演
「日本における生涯スポーツの動向
とニュースポーツ団体の出現」
野川春夫 (日本・鹿屋体育大学)
「生涯スポーツの場の設定」
オスカー・アズエロ・ルイーズ
(コロンビア)
・一般発表
・グループ討議
オープニングセレモニー
- 6月27日 研究セッションⅢ「生涯スポーツにお
けるマーケティングとプロモーション」
・基調講演
「生涯スポーツの優れたマーケティング
とプロモーション」
ラス・キスピー (カナダ・パー
ティシパクション)

- 「TAFISA 事業のプロモーション」
クラウス・ラインハルト（ドイツ・インパクト社）
- ・一般発表
 - ・グループ討議
- 夕食とエンターテインメント
- 6月28日 研究セッションⅣ「生涯スポーツとボランティア」
- ・基調講演
「ドイツにおける新キャンペーン」
ユルゲン・パルム（ドイツ・ドイツスポーツ連盟）
「生涯スポーツにおけるボランティアの重要性」
アイザック・ブラッツ（イスラエル・生涯スポーツ協会）
 - ・一般発表
 - ・グループ討議
- 研究セッションⅤ「言語別グループ討議の総括」
イスラエルフォークダンスの夕べ
- 6月29日 TAFISA 総会
ASFAA 昼食会
ASFAA 会議
TAFISA 理事会
さよならパーティー
- 6月30日 出国
イスラエル古跡巡り

- 運動—57ヶ国における発展の分析。体力づくり情報 TrimJapan, 21, 2-16.
- 島 美紀 (1995). 第3回ASFAAコンgres—アジア・オセアニア地域のスポーツ・フォー・オール国際会議が開かれる—。体力づくり情報 TrimJapan, 43, 29-31.
- 山口泰雄 (1993). 諸外国における生涯スポーツの組織。レクリエーション・コーディネーター共通科目テキスト。日本レクリエーション協会, 45-49.
- 山口泰雄 (1994). 第1回ヨーロッパスポーツ・フォー・オール・アカデミー。体力づくり情報 TrimJapan, 42, 34-39.

注記：本稿は、体力づくり情報 TrimJapan (No.45, pp. 42-45) に掲載した「第14回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議」を加筆したものである。

【参考文献】

- 青木 高 (1993). 国際チャレンジ・デー。体力づくり情報 TrimJapan, 38, 18-20.
- 青木 高 (1994). 生涯スポーツの新たな展開。体力づくり情報 TrimJapan, 40, 38-41.
- 青木 高・池田克紀 (1989). 第11回国際トリム・フィットネス会議。体力づくり情報 TrimJapan, 21, 17-21.
- 野川春夫 (1995). 第14回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議。体力づくり情報 TrimJapan, 45, 29-33.
- 野川春夫 (1996). 「諸外国における健康・体力づくりの組織と活動」健康・スポーツの社会学 (山口泰雄編)。東京：建帛社。(印刷中)
- Palm, J. (1989). スポーツ・フォー・オールは全世界的な